

# 伊藤和行さんの思い出

斎藤 憲\*

Memories of Kazuyuki Ito

Ken SAITO

私は 1980 年代から 90 年代前半まで、大学院からポストを見つけるまでの期間、東大科哲の大学院で先輩の伊藤和行さんと一緒にいた。

伊藤さんは 1979 年に北海道大学理学部物理学を卒業して、東大のいわゆる科哲、科学史科学哲学の大学院修士課程に入学されました。当時の大学院の正式名称は大学院理学系研究科科学史科学基礎論専門課程です。現在と違って、理学系研究科、つまり理学部の大学院に属していました。課程の名称が科学史科学哲学でなく、科学史科学基礎論であったのもそのためと思われます。

私は 1976 年理科一類入学で、79 年には科哲の学部 4 年生でした。伊藤さんに最初に会ったのがいつか、明確な記憶はありません。ともかく、その翌年度の 1980 年度に、伊藤さんは修士 2 年、私は数学科の大学院を無謀にも受験して失敗し、学士入学で文学部イタリア文学科の 3 年でした。この年度の初めに、教養学部生でなくなった私は駒場キャンパス内の駒場寮から、三鷹市下連雀 2 丁目の井の頭寮に引っ越ししました。以前は日本無線という会社の寮であったという、木造の古い寮には空き部屋がありました。私が伊藤さんに、朝夕の食事もあるし、生活費の安い寮に引っ越さないかと勧めて、伊藤さんも寮生となりました。当時、家賃にあたる寄宿料は月 100 円、電気代などの負担が約 4000 円でした。食事は朝食 170 円、夕食 270 円であったように記憶しています。

伊藤さんはこの井の頭寮で猛然と修士論文に取り組みます。伊藤さんが凄かったのは、科哲の大学院に入ってから、ラテン語とイタリア語をマスターしたことです（前年 9 月の大学院合格後から学習されていたとは思いますが）。私は大学 2 年のときからラテン語を、3 年のときからイタリア語を学び、さらに学士入学で 2 年間、イタリア文学科で道草を食ったので、外国語の学習にたっぷり時間をかけたのですが、伊藤さんは同じことを、実質的に修士の 1 年目の 1 年間でやってしまったわけです。当時

---

\* 大阪府立大学名誉教授

は、大学院に伊東俊太郎先生を指導教官とする高橋憲一、楠葉隆徳、三浦伸夫、鈴木孝典という錚錚たるメンバーがいて（高橋さんはすでにオーバードクターだったかもしれない）、研究に必要な言語を学習するのは当たり前という雰囲気がありました。

伊藤さんの修士論文のテーマはジョルダノー・ブルーノの魔術論でした。ワープロのない当時は、400字詰め原稿用紙に手書きで論文を書くわけですが、それでも修論なら500枚（20万字）くらいの長さは当たり前でした。手書きだと、まず下書きを書きます。部分ごとに書いていって、それをまとめていきますが、当然、書き直しが生じて、原稿用紙の上に削除や挿入が入っていきます。それが錯綜してきたら、新しい原稿用紙に写して整理する、これを繰り返します。頻繁に出る長い名前や、面倒な漢字は適当に略号を作ります。伊藤さんの論文には、魔術という言葉が繰り返し現われます。魔術の「魔」は「まだれ」の中に「林」と「鬼」という字が入るわけですが、下書きではそんなの書いちゃいられないので、「まだれ」の中にカタカナの「マ」を書いていました。

修士論文の提出が近づくと、1日13時間くらいは机に向かうことになります。今でもよく覚えているのは、夕食が出来る6時になると伊藤さんがちゃんちゃんこを羽織って食堂に降りてくる（部屋の暖房は十分でなかったので、厚着が必要でした）。食事をとって、NHKニュースを見て、全国ニュースの最後に、当時はまだ目新しかった気象衛星「ひまわり」の雲の写真を見て、これが終わると7時25分頃、伊藤さんは「さあやんなくっちゃ」とか言って部屋に戻る。毎日その繰り返しでした。

手書きの論文は最後に清書しなくてはなりません。修正や挿入すべき文章を確認して、ときには参考文献を再度確認したりするので、1時間に原稿用紙3枚程度しか進みません。1日13時間やって40枚。500枚の修士論文の清書には10日以上かかります。間に合わない人は、修士1年の後輩、ときには博士課程の先輩などに清書の手伝いを頼みます。すると修論審査のときに「君の修論はいろんな筆跡があるねえ」と審査の先生に嫌味を言われることになります。伊藤さんは清書の応援を頼む必要もなく、修論を仕上げた1981年春に博士課程に進学しました。

なお、伊藤さんはアルバイトをしていませんでした。彼の語ったところでは、お父さんが、東大に行くのだから、アルバイトなんかで時間をとられては他の人にかなうはずがない、山を売っても仕送りはするから勉強に専念しろ、とっておられたとのこと。伊藤さんのお実家は道東、網走と北見の間にある美幌町の農家です。そのお父様に、伊藤さんのお葬式の折に初めてお目にかかりました。このお父様のおかげで、学者としての伊藤さんがあったということでしょう。

その後 1980 年代後半に伊藤さんはフィレンツェに留学します。私は 86 年秋から 88 年春までローマに留学しましたが、同時期に伊藤さんはフィレンツェにいらして、時々遊びに行きました。また、気象大学校にポストを見つけた羽片俊夫さんも同時期にフィレンツェに留学していました。伊藤さんはいったん帰国した後、学振の海外特別研究員という名称だったと思いますが、3 年間の研究員に採用されて、かなり長くイタリアに滞在されました。伊藤さんが先に帰国して、私の留学中に、数十倍の倍率の抽選で当たった賃貸の公団住宅の留守番として伊藤さんに住んでいただいたという思い出もあります。

その前、1983 年ごろですが、伊東俊太郎先生が講談社の「人類の知的遺産」の『ガリレオ』を執筆され、その翻訳部分の担当を伊藤さん、羽片さん、私の 3 人に依頼されました。「人類の知的遺産」は、大成功した中央公論社の「世界の名著」にいわば対抗して、著作の翻訳よりも解説を重視したシリーズでした。『ガリレオ』では 350 ページほどの本のうち翻訳は約 130 ページ。ガリレオ初期の著作『運動について』の抄訳、短い書簡 2 通、そして晩年の著作『新科学論議』の抄訳から成ります。

出版された本には 3 人それぞれの担当部分が明記されていますが、翻訳原稿は基本的に 3 人で検討し、最終的にそれぞれの担当部分に責任を持つ形で作業しました。当時は駒場の 8 号館 4 階に科学史の研究室や院生室があり、そこで集まっては議論していました。2 つの 2 分の 1 スパンの細長い部屋が院生室で、我々だけでなく、院生やオーバードクターが曜日と時間を決めて集まっては、さまざまな読書会、研究会を開いていました。そこに本はもちろん、着替えまで置いていて、家にいつ帰っているのか分からない方もおられました。

久しぶりに『新科学論議』の翻訳を見ると、登場人物のうちアリストテレス学者のシンプリーチョが、真空中なら鉛も羊毛の同じ速さで落ちると言われて、そんなことは信じられない、といきり立つ場面があります。それに対して、アカデミー会員（つまりガリレオ）の弟子という設定の登場人物サルヴィアータが「まあまあ落ち着いて」となだめにかかります。これは意識というよりは超訳で、もとのイタリア語は *pian piano*。piano は音楽で「弱く」という意味で使われますが、ここでは「ゆっくりと」「少しずつ」という意味です。「ゆっくり順を追って説明しましょう」ということですが、「まあまあ落ち着いて」という訳は私の提案でした。和行さんと羽片俊夫さんが、思い切った訳だねえとひとしきり笑って、まあいいんじゃない、ということになったように記憶しています。それでこの「超訳」が印刷されて残っています。

翻訳を引受ける条件をめぐっては伊東俊太郎先生と話をした際には、和行さんが翻

訳料の分配についてはっきり主張してくれて、いやそれなら降りてもいいんですよ、と和行さんが発言するという険悪な場面も一瞬ありました。先輩としてそういう役回りを引受けてくれたのは大変有り難いことでした。

翻訳した3人の間では「人類の知的遺産」の抄訳をもとに、その全訳を出版しようと言っていましたが、結局この計画は実現しませんでした。『新科学論議』はそれほど膨大な著作ではありません。その気になればすぐ出来るさと甘く見ていたのがあだになったのかもしれませんが。3人がそれぞれ別のところにポストを得て、それぞれに忙しくそのうちと思っているうちに伊藤さんはこの世を去ってしまいました。大事な仕事は毎日、せめて毎週、少しずつでも先に進めるべきです。Vita, si uti scias, longa est.（「人生は使い方を知っていれば長い。」）セネカの『人生の短さについて』の一節です。逆に言えば、賢く使わないと人生の時間はあっという間になります。

ポストを得ることは、今は30年前よりさらに大変になったように思います。1991年の初めに千葉大の坂本賢三先生が亡くなられ、空いたポストの人事で、伊藤さんと私と、確か中島秀人さんの業績をまとめて千葉大に送ることになりました。公募ではなく、千葉大の側から、誰と誰、といういわば指名入札のような形で候補者が指定された選考でした。今となっては考えられない話です。面接に行って、業績のプレゼンテーションをして質問に答えたこと、その後ビールが出て来て、飲みながら話の続きをしたことを覚えています。この人事で1992年4月に私が採用されて、伊藤さんは、私より3年も早く大学院に進学していたのに、さらに待たされることになりました。そのとき35歳でしたから、さぞ辛かったと思います。しかしその後、京都大学に採用され、さまざまな関心を持つ学生を見事に指導されました。ここから先はこの追悼号で他の方が語ってくださると思います。

私は1997年に大阪府立大に移りました。京都が近くなったので、京大の伊藤さんの研究室には時々お邪魔しました。いつ行っても、学生、大学院生を含め、リラックスした雰囲気の研究室で、これはやはり伊藤さんの人柄のおかげだったと思います。

私は2020年春に早期退職して北海道に引っ越したので、すでにご家族が札幌にお住まいの伊藤さんが定年になって北海道に帰ってくるのを楽しみにしていました。今度こそガリレオの翻訳を完成できそうだと。

しかし20年秋に、病気で休職して札幌で療養するという突然のメールがあり、さらに札幌に戻った伊藤さんから治療が難しい癌であると知らされました。私を知る限り、伊藤さんの最後の仕事は、21年5月に出版された『科学史事典』の表紙に採用したガリレオ『世界系対話』（いわゆる『天文対話』）の扉絵に対する解説原稿です。3月のこ

とですが、伊藤さんが書いてくださった原稿をもとに、メールで細かいことを確認しつつ、橋本毅彦さんが後半部を書き加えて解説が完成しました。

入院後は、コロナウイルスの流行のため、面会が厳しく制限され、お二人のご兄弟も面会できなかったそうです。葬儀は故郷の道東の美幌町で行なわれました。お兄さんの伊藤博明さんを別にすれば、私が研究関係者では唯一の参列者となりました。弔電や花輪の数が参列者の倍くらいあり、心のこもった長文の弔電が披露され、皆に慕われた伊藤さんの人柄が改めて偲ばれる葬儀となりました。

亡くなる前に急に容態が悪化したためか、伊藤さんのパソコンのパスワードが分からず、多分そこにあったはずの『新科学論議』の翻訳原稿は、他の原稿とともに見ることはできません。人生、先がどうなるかは分かりません。自分がいなくなった後に残したいものは整理して、パスワードも残しておくべきだと痛感しました。

これから研究成果をまとめることができる時期に、伊藤さんが病魔に連れ去られたことは言葉が見つからないほど残念ですし、おちゃめな人柄の伊藤さんにもう会えないことはそれに劣らず残念です。しかし伊藤さんの著作と、教えを受けた次の世代の方々を通して、伊藤さんの業績は伝えられていくことと思います。伊藤さんのご冥福をお祈りいたします。

本稿は日本科学史学会西日本研究大会（2021年11月7日オンライン開催）、伊藤和行先生を偲ぶ会（2022年3月17日オンライン開催）の際に用意した原稿に手を入れたものです。